

## 博士論文要約

### ミシェル・フーコーと文学

柴田 秀樹

1980年、ミシェル・フーコーは『ル・モンド』紙上で、「覆面の哲学者 (le philosophe masqué)」と題された匿名の対談を行った。「覆面の哲学者」というこの呼称ほど、フーコーという存在がもつある種の「とらえどころのなさ」を端的に表したものはないだろう。彼はある時は狂人たちの「大いなる閉じ込め (grand enfermement)」について書き、またある時は古代ギリシア・ローマの性関係について書いた。一方では異形の作家レーモン・ルーセルに情熱的なモノグラフィーを捧げるかと思えば、他方では監獄制度の分析を通じて近代社会に遍在する「権力」の存在を描き出してみせた。このように多岐に渡る領域で思考し、著述し、発言した人物を、単一のイメージのもとに捉えることは困難を極める。あたかも覆面を次々と取り換えるかのごとく、彼はその生涯を通じて思考の対象を移動させつづけ、それに応じて自らのイメージを絶えることなく変容させつづけたのである。

フーコーがその生涯に身に纏った覆面のひとつに、「文学批評家」としての覆面がある。1960年代、フーコーは「文学」に関する膨大なテキストを発表した。『クリティック』や『テル・ケル』といった文芸雑誌に掲載されたそれらのテキストでは、ルソー、サドから、バタイユ、クロソウスキー、ブランショ、ボルヘス、ロブ＝グリエやソレルスに至るフーコーの同時代人に至るまで、時代も流派も文体も異にする多種多様な作家が議論の対象とされている。こうした個別の作家論以外にも、『狂気の歴史』や『言葉と物』といった60年代を代表する著作において、「文学」には特異なステータスが与えられ、主要なトポスのひとつとして扱われている。なかでもレーモン・ルーセルという異形の作家はフーコーの愛するところであり、濃密なモノグラフィーを捧げるほどであった。

しかし、こうした熱狂の時期を経たのち、60年代後半に彼は次第に「文学」を論じることを控えるようになってゆく。1970年に日本で行われた清水徹・渡辺守章との鼎談「文学・狂気・社会」はひとつの分水嶺をなしており、そのなかでフーコーは率直に「文学」への失望と関心の喪失を打ち明け、「文学の外に出なければならぬ」と明言するに至る。そして70年代以降その死の年である1984年に至るまで、「文学」という主題は目立たないものとなってしまうのである。

このように、「文学批評家」としてのフーコーは、彼が身に纏った多数にのぼる「覆面」のなかでも、60年代に集中している点で特異なものであるといえる。だが、事態はさらに複雑なものとなる。70年代以降、フーコーは文学を完全に見放したわけではない。文学作品、あるいは文学者への言及は、フーコーのテキストのなかに間歇的なかたちで出現しつづけるのである。しかも、かつてとは異なる姿のもとに。

「文学」が晩年のフーコーにおいて残存していた証拠のひとつとして、1980年代のフーコーが頻繁に言及することになる、「経験としてのフィクション」という議論を挙げることができよう。そこにおいてフーコーは自らの著作を「歴史」でも「小説」でもない「フィクション」であるとし、読者を変容させ、「これまでとは別様に」物事を見るようにさせる「経験」をもたらす機能を「フィクション」は帯びているとする。そして、哲学と文学とは、「フィクション」としての性格を共有したものとして論じられることになるのである。「文学批評家」としての覆面を完全に取り戻すことこそなかったものの、死によって生涯が断ち切られるその直前のフーコーは、「フィクション」という観点からの「文学」への接近を垣間見せていたのではないだろうか？

これはほんの一例にすぎない。70年代以降のフーコーのテキストのなかには、「フィクション」の問題のほかにも、「演劇」という60年代のフーコーが論じるものであった文学ジャンルについての言及が増え、また「制度としての文学」には属さないものの、「文学」の近傍にあるものとしてフーコーが位置づけるようなテキストに関心が向けられるようになるといったように、60年代とは異なる視座から「文学」なるものにアプローチする姿勢を看取することができる。

こうした「文学批評家」としてのフーコーに関して、これまでの先行研究では十分に光が当てられてきたとはいえない。ベアトリアス・アンの著作に代表される、フーコーの哲学的読解において、「文学」を論じるフーコーのテキストはほとんど黙殺に近い扱いを受けている。これらの研究において、フーコーの「文学」に関するテキストは、その哲学的テキストに比して二次的なものとみなされているのである。またジュディット・ルベルやジャン＝フランソワ＝ファヴローなど、フーコーにおける「文学」の問題に焦点を当てた先行研究も、それぞれの問題を抱えている。例えばルヴェルはフーコーの文学論を「不連続の思想」の表れのひとつとして取り扱うが、主眼はあくまで「不連続の思想」がどのように変貌しながらも一貫したものであったかに置かれており、議論は文学論に立ち止まることなく、それ以降の「政治」や「主体」を論じるフーコーの側にすぐさま移ってしまう。またルヴェルは、「フーコーは文学を放棄した」という前提を自明のものとするがあまり、70年代以降のフーコーにおける文学の残存を見落としてしまっている。

またファヴローの研究は、フーコーの文学に関わるテキストを仔細漏らさず網羅した重要なものだが、その野望のあまり、フーコーの文学論に確かに存在している、いくつかの特異な点を看過している点に問題がある。例えば、フーコーの文学論においてマラルメという文学者が占めている重要性である。『言葉と物』やその他の文学論において、マラルメは近代文学の誕生と精髓を体現した存在として称揚されており、時としてはニーチェと比肩するほどの地位が与えられるほどである。しかし、ファヴローはこの点については十分に注意を払っているとはいえない。これ以外にも、フーコーの全文学論のなかで、クロソウスキーを論じた「血を流す言葉」が「翻訳論」としての特異性を持っていること、またフーコーが偏愛した作家レーモン・ルーセルについてのモノグラフィー『レーモン・ルーセル』が「私の隠れ家」とフーコーによって呼称されていることの意味など、ファヴローが言及していない、しかし注目に値する事実は確かに存在しているのである。

それゆえ本論文では、「文学」をめぐるフーコーのテキストを、60年代から晩

年に至るまで追跡することを通じて、「文学批評家」という覆面がいかなる顔貌をしていたのか、それはフーコーの思想的変遷につれていかに変容してきたのかを浮き彫りにすることを目的とした。

第一部は、フーコーの 60 年代のテキストを対象とした。第一章では、フーコーの 60 年代文学論において、「書物」「図書館」という二つの特権的な形象がみられることに注目し、これら二つの形象が「アルシーヴ」といういまひとつの形象によって置き換えられていく次第を辿った。これによって、文学言語における「空間性」とアルシーヴにおける「時間性」の相克を明らかにし、60 年代後半にかけてフーコーが「文学」から離反していく軌跡を描き出した。

第二章では、こうした軌跡をより具体的に示す特権的な例として、60 年代文学論におけるマラルメ像の変貌に注目した。フーコーにとってマラルメは、「文学」の精髓を体現した文学者として、哲学におけるニーチェと比肩する一方で、「文学」から離反するにつれて語られることが稀となってしまふ。こうした過程を追跡することによって、マラルメとは、「言語」というものの存在に魅了されていた 60 年代フーコーの関心のありかを映し出す「フィクション」であり「鏡」のような存在だったことを明らかにした。

こうして第一章、第二章で 60 年代フーコー文学論の変遷を通観したのち、第三章では、こうした変遷とは外れたところにあるフーコー文学論の特異点として、フーコーが唯一「翻訳」という主題について明示的に語ったテキストである「血を流す言葉」に注目した。先行研究では顧みられることが少ないこのテキストを、クロソウスキーを論じたいまひとつのテキストである「アクタイオンの散文」を重ね合わせて読むことによって、「侵犯」「起源」「シミュラクル」「死」というフーコー文学論に頻出する主題との連続性を証明した。それと同時に、このテキストはまさに「翻訳」という主題を扱ったものであるというその点において、他の文学論には還元しがたい独自性を備えたものとなっていることを指摘した。

つづく第四章では、フーコー文学論におけるさらなる特異点として、『レーモン・ルーセル』に注目した。本論文では、『レーモン・ルーセル』がフーコーの全著作のなかで占めている「例外性」「個人性」にこそ注目すべきだという視点から、

この著作においてフーコーが展開している、「エクリチュールへのアプローチ」を形式的側面から考察した。それによって、『レーモン・ルーセル』が「円環」というまさしくルーセル的な形式のもとに書かれたものである点で「例外」的であり、かつこのテキストを書くフーコー自身の「私」が痕跡のように刻み込まれているという点で「個人的」なものであるということを明らかにした。

このように第一部では、60年代フーコーの文学論をその思想的変遷のなかに位置づけるとともに、マラルメ、クロソウスキー、ルーセルをめぐるフーコーのテキストがいかにその文学論のなかで特異な地位を占めているかを探求した。こうした本論文の試みは、「文学批評家」という覆面を60年代後半に一度は捨てるに至ったフーコーの姿とともに、その覆面を目立たないながらも彩っていた特異な紋様を描き出すものであったといえることができる。

これに対して第二部では、70年代以降のフーコーと「文学」との関係に焦点を当てた。まず、「文学」からの離反を明言するフーコーの発言とは裏腹に、70年代以降のフーコーのテキストのなかには、「制度としての文学」をそれたところにある「無名のディスクール」「日常的なパロール」が、あたかもマラルメやクロソウスキーらと入れ替わるように出現していることを指摘した。

こうした前提のもと、第五章では、70年代以降のフーコーと「文学」の関係の変容を示すテキストとして、「汚辱に塗れた人々の生」を取り上げ、このテキストにおいて「ヌーヴェル」と「文学」とのあいだにフーコーがいかなる差異を設けているかに注目するとともに、二者が70年代のフーコーが精力的に論じた権力論といかに関連しているかを論じた。それによって、70年代のフーコーが文学論を「権力と生」という問題構成に基づいて論じるようになったことを明らかにした。それとともに、「文学」と「ヌーヴェル」とのフーコーの区別が曖昧である点に、70年代以降もフーコーが「文学」を完全には放棄しなかった要因を見出した。

第六章では、70年代以降のフーコーと「文学」との関係の変容を示すいまひとつの徴候として、「演劇」という文学ジャンルが70年代以降のフーコーのなかで次第に重要性を増していくことに注目し、ここに70年代以降のフーコーにおいて「文学」が形を変えながらも残存しているいまひとつの徴候を見出そうと試み

た。60年代のフーコーにおいて時として批判的に言及された「演劇」は、70年代以降「権力と生」がフーコーの関心となっていくにつれて、権力関係の変容をもたらす力を持ったものとして肯定的な評価を受けることになる。本論文ではこうした変遷を辿ったうえで、フーコーにおいて「演劇」は、その意味合いを変えながらも、つねに「文学」とのあいだに一定の距離を保っていたこと、そしてこの距離は単に否定的なものではなく、この距離によって、その時々フーコーが「文学」に寄せていた関心のありかを浮き彫りにするという特異な立場を占めていたということを指摘した。

第七章では、「フィクション」についてのフーコーの議論に注目し、70年代後半以降のフーコーにおいて「文学」が残存していたことのさらなる証拠をそうした議論のなかに見出そうと試みた。それによって、「文学」を「死」と関連付けていた60年代と異なり、晩年のフーコーは「生」を共通項として「フィクション」「エクリチュール」そして「文学」を結び付けていることを明らかにし、この点に晩年のフーコーの発言のなかで70年代以降長らく言及を控えるようになっていたブランショやルーセルらの名が回帰している理由を求めた。

こうして第二部で論じたとおり、70年代以降のフーコーは「文学批評家」という覆面を完全に放棄したわけではない。「死」という紋様は「生」に代わり、また「権力」や「演劇」という新たな紋様が加わるといったように、その覆面の顔貌は60年代と全く異なっている。しかしそれでもなお、晩年に至るまでフーコーは「文学」について語ることを辞めはしなかった。「文学批評家」という覆面は、折に触れてその死に至るまでフーコーの顔を飾っていたのである。